「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例書

学校名：岩手県立岩泉高等学校

## Ⅰ　事業の概要（地域の実情含む）

1　岩泉町

北上山地の東部に位置し、992.36 平方キロメートル（東西 51㎞、南北 41㎞）の本州一広い町である。盛岡市など３市１町３村に隣接し、東方は北部陸中海岸の太平洋に臨む。耕地面積は少なく、林野率が高い。小本川、安家川、摂待川の流域に沿って集落を形成しており、人口は約 9,000 人である。

安家地区から岩泉地区に延びる石灰岩層は、日本三大鍾乳洞のひとつとして名高い龍泉洞をはじめ、氷渡洞、安家洞などの鍾乳洞群を形成している。

東日本大震災津波による小本地区の復興半ば、2016 年台風 10 号（以下、台風 10 号）豪雨災害で町の多くが被災。また、2019 年発災の台風 19 号でも小本地区を中心に被災した。

2　岩泉高等学校

地域の青少年教育の必要性が高まる中、凶事・凶作の解決のために町立農業学校として 1943 年に設置された。現在は県立の普通科高校、岩泉・田野畑地域唯一の高校として、2023 年に創立 80 周年を迎える予定である。今年度は 123 名の生徒が在籍している。

3　復興教育について

地域の特質や課題を踏まえつつ、年間を通して継続的に防災・復興教育に取り組み、これまで発生した災害と、今後起こり得る災害について学ぶ。

また、これからの地域の復興に向けて、自身の将来と地域の現状を関連づけて考察することをとおして、郷土を愛し、その復興・発展を支える意欲を涵養する。

【避難訓練の様子】

## Ⅱ　取組の概要

1　避難訓練（５月 24 日）

迅速かつ安全な避難を行い、災害時に備えることをねらいとして、地震を想定した訓練を実施した。新型コロナウイルスの関係で消防署員は立ち会わず、学校独自で実施した。

2　SDGs 演習

NPO 法人環境パートナーシップいわてから丸尾美由紀氏を招き、昨年 1 年次に探究学習で学んだ

SDGｓの視点について、演習を通して検証し理解を深めた。

【講師の丸尾先生と、SDGs をカードゲームで検証】

3　復興教育

（1）復興を考える科学的思考力養成講座

（10 月 18 日）

岩手大学理工学部の高木浩一教授を招き、１・２学年対象に、研究リテラシーの基本ともいえる科学的思考力について、実演実験を交えながらガイダンスいただいた。

【講座での実演実験の様子】

（2）事前ガイダンス（10 月 21 日）

ア　１学年

うのすまい・トモス、東日本大震災津波伝承館を訪問する上で、大震災や釜石市・陸前高田市に関わる事前学習を行った。

イ　２学年

インターンシップに臨む上での心構えや礼儀等のガイダンスを行った。

ウ　３学年

副読本「いきる」「かかわる」「そなえる」を使って、災害と復興に関する事前学習を行った。

（3）復興教育事業当日

ア　１学年（10 月 25 日）

うのすまい・トモス、東日本大震災津波伝承館を訪問し、担当職員の方からさまざまな解説を聞くことで、当時の被害状況や現在までの復興の現状を知ることができた。

【１学年　見学の様子】

イ　２学年（10 月 25 日～27 日）

岩泉町、普代村、田野畑村、宮古市あわせて 26 の事業所にてインターンシップを行った。企業での就労体験を通じて、企業や業界が抱える課題と向き合い、よりよい労働環境を作るために SDGs を軸に探究した。インターンシップをとおして地元の良さを再発見するとともに、働くことの意義を培った。

【２学年　インターンシップの様子】

ウ　３学年（10 月 26 日）

午前に避難所運営ゲームを実施し、午後は震災伝承のあり方について、NPO 法人「おらが大槌夢広場」の神谷未生氏から講話をいただいた。

【３学年　避難所運営ゲームの様子】

【３学年　講演会の様子】

4　学校安全研修

（1）職員対象：救命救急講習（6 月 13 日）

10 月に生徒を対象とした救命救急講習の実施を見据えて、教職員を対象にＡＥＤの使用方法や心肺蘇生法の講習を行った。

【救命救急講習（職員）の様子】

（2）生徒対象：救命救急講習（10 月 12 日～14 日）

全校生徒を対象に、ＡＥＤの使用方法や心肺蘇生法の講習を行うことで生命の大切さ・事故や災害の当事者として一人ひとり何ができるかを学んだ。新型コロナウイルス対策により、学年ごとに実施日を変えて行った。

【救命救急講習（生徒）の様子】

（3）職員対象：マップマヌーバー演習（11 月 14 日）

生徒の安全管理に係る初動の大切さの再認識をねらいとして、教職員を４班に分けてワークショップ形式で、２つのケースモデルについて演習を実施した。

5　復興教育を終えて（生徒のレポートから）

【1】「今回の復興教育での取り組みを踏まえて『いきる』『かかわる』『そなえる』のうち、どの教育的価値が心に残りましたか。

（1年）私は「いきる」の価値が印象的です。なぜなら、災害が起きた際に、逃げ遅れそうな人を助けるか、自身の命を最優先して逃げるか？災害が起きた時には、優しさよりもまずは自分の命を守ろうという強い意志が大切であることを、復興教育

で学び、気がついたからです。自分の命を守り抜いたならば、逃げ遅れそうな人を助けに行くべきなのか、その場の状況をよく考えて、助けに行けることが最も素晴らしいことだと思いました。

（２年）私は「かかわる」が心に残りました。なぜなら、さまざまな人とつながって助け合うことは大切だと思うからです。実際、災害が起きた時に一人暮らしのお年寄りが一人取り残されてしまったことをテレビで観たことがあります。私の周りにもお年寄りは多いので、普段から関わりをもって、災害が起きた際には助け合えるような環境を維持していきたいと考えました。また、まずは自分自身が身を守れるように災害に対する知識を増やしていきたいです。

（３年）私は「そなえる」を特に意識していきたいと思います。東日本大震災が起こった時、誰もがこんな大きな地震が来ないと考えていたと思います。実際に震災が起きた後、買い物に行けなくて食料や日用品を手に入れられないでいた人たちが多かったと思います。最近では、南海トラフの地震が近いうちに起こることも予測されています。そこで、いつ地震が来てもいいように防災リュックの準備をしておいた方が良いなと思いました。また、自分たちの地域のハザードマップもしっかり確認しておきたいです。「そなえる」ことの必要性を感じました。

【２】今後災害が起こった際、どのように行動したいと考えますか。

（１年）私が住んでいる地域は、津波の被害の心配はないですが、台風や大雨の被害は十分にあり得るため、気を緩めてはいけないと思いました。東日本大震災や台風 10 号を経験した時、あり得ない出来事に焦ってしまい、正常な判断ができなかった記憶があります。また、避難を始めるべきかわからず、川が氾濫する寸前に避難をしました。一歩の遅れが今後に大きな影響を与えると身にしみて感じました。そのため、事前の準備が大切だと思います。近所との連携や、避難先の確認、地区での声かけ、次の世代につなげていくことなど、たくさんの課題がありますが、それを少しずつ解決していき、もしもの時に正しい判断と行動ができるようにしたいです。

（２年）私はまず、自分ができることを探したいです。台風 10 号の時、私は小学５年生でした。何もわからず、ただ怖いという感情しかありませんでしたが、小学６年生の先輩は、体育館に来た物資を並べたり、トイレの水を汲んだり、自分のできることを率先して行っていました。あの時は何もできませんでしたが、今はある程度の知識と、勇気と、助けたい気持ちがあります。だから私は、もしも災害が起こった時は率先してできることを手伝いたいです。また、私の身の周りで起こらなくても、近い地域なら手伝いに行き、遠い地域なら募金などで支援できるようになりたいです。台風の時には助けてもらって嬉しかったので、今度は私が助ける側になれるよう、「率先」という言葉を大切に、今後のことを考えていきたいです。

（３年）自分の判断だけで行動するのではなく、周りの意見を十分に聞いた上で自信を持って行動したい。避難所運営ゲームをやる前は上手くできると思っていたが、実際にやってみると難しくて考えることが多く困難でした。まだまだ知識が足りないと思った。私は看護師を目指しているので、災害が発生した時、患者さんの安全も守る必要があり、どんな時も臨機応変に対応・行動できるように、看護についてだけではなく、災害についても勉強していきたい。

## Ⅲ　取組の成果と課題

１　成果

本校では、これまでも避難訓練、避難所運営ゲーム、東日本大震災津波伝承館見学など、主として「防災」に重点を置いて復興教育に取り組んできた。また、救命救急講習も毎年実施しており、ケガや急病人が発生した際も生徒自身は、自主的に行動し救護活動に参加することが多い。これら復興や防災に関する取り組みを通して、自身の将来と、岩泉町という地域の現状を関連づけて考察することができたと考えられ、自他の生命尊重の精神を育てることができた。

２　課題

今年度も新型コロナウイルスの関連でさまざま活動が制限されるなか、復興教育に関する事業の進め方においてもさらなる工夫を求められた。今後、事業を継続させていくためにも、「防災」だけの視点ではなく、復興を視野に入れた「地域づくり」など、本校の魅力ある活動の一つでもある郷土芸能も取り入れながら、地域の実情を理解する取り組みを増やし、実現可能な計画が立案できるよう進めていきたい。